

国際政治学が専門だと、海外出張は資料館での資料収集や国際会議の出席などに限られることも多い。しかし、私はなるべく資料館や会議場の外に出かけ、現地調査や視察という形で、できるだけあちこちを回るようにしている。

昨年九月、タイからマレーシアまで、鉄道を使つての現地調査を行った。バンコクから両国の国境にあるバタンパザール駅はたつぷり一八時間ほど、車中泊の旅であった。寝台車の外観は古く、内部空間は昔の日本の夜行列車を彷彿とさせ、ノスタルジックな鉄道の旅という趣であった。

ところが、マレーシア側で目にしたのは、タイ側のそれとはまったく異なる、東京の私鉄の新型車両にとてもよく似た真新しい車体であった。さらに、途中下車したバタワース駅からクアラルンプールのセントラル駅までは、日本のJRの在来線特急に似た新型車両の高速鉄道。

そして、大勢の現地の人々が、この真新しい鉄道を使つたのである。

さらに驚いたのは、クアラルンプールで数人の研究者らのインタビューを行った際、鉄道でバンコクから来たと言つたら、信じられない、あんな不便なものには何十年も乗つてないよ、と口々に言われたことである。

東南アジアにおける鉄道の将来

大庭三枝

東南アジアの人々は鉄道にそれほどの思い入れはない、ということがある。それはあまりにも不便だったことも一因であり、よって今後、彼らが鉄道の利便性を知れば、関心は高まるかもしれない。つい先日発表された、クアラルンプール・シンガポール間の高速鉄道計画の帰趨が大いに気になるところである。

(東京理科大学 教授)

Essay



ウコン

随

筆

小水力の専門家として他の再エネ資源の専門家と会うことがある。ベース電源で、かつ傍流ということで、東日本大震災前から地熱の専門家とは、しばしば市民や学生向けのセミナーなどでご一緒し、温泉と春の小川を話題にした。

温泉好きの人が多いように、変動帯に位置する日本では地下から湧き出る地熱を案外身近なものとして知っている。大気や地表の土・水と接触して生きているわたしたちは、風や水の力を体感している。

しかし、知っていないが、快適な暮らしを支える電気とこれらが結びつかない。身近にあるのに、小水力などを合理的に利用しようという動機づけが、なぜか働かない。わたしたちは、エネルギーは他人事で、お上から授かっていると考えていないだろうか？

「森の生活」のH.D.ソローは、人間の必需品は食料、ねぐら、衣服そして燃料だと

小林久

言った。かつて煮炊き、暖のため、さらに食料の調製・加工のために、裏山、小川は必需品の燃料・動力を得る場であり、エネルギーは身近なものだった。農山村には、そのようなエネルギー資源がとくに多い。

必需品のエネルギー

しかし、今は一〇〇キロワットを保持して生産できる資源がそこにあるのに、補助金メニューばかりを見て、自らの頭で考えようとしぬ人がほとんどだ。中古品を探しても、小さな流れのエネルギーを取り出すとすると欧州の農山村に暮らす人たちは雲泥の差である。

大規模火力や原子力の本質的な議論のためにも、日本社会はエネルギーをもっと個人やコミュニティの問題とし、その生産供給を身近に考えることのできる人を増やす必要があるだろう。そのためには、エネルギーリテラシーを高める教育が重要なかもしれない。

(茨城大学農学部 教授)